

性に合わせた作業指示等の条件を与えなければならないことがわかった。

マン・マシーンモデルについては、今回の調査から得られた、限られた情報（静的な情報）をもとに、動的なオートマトンモデルを作成するので、若干無理なところもあり、主観的な判断が入っている。しかし、マン・マシーンモデルがオートマトンで近似可能であるということが理解された。

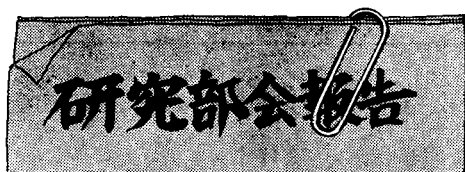
動的な情報を得ること、モデルの整合性の向上、モデルの合成による多元化が今後の課題である。人間の問題

という複雑な分野にも数量化による取組みが進んでいくであろうし、そうなることを期待したい。

なおこの研究は早稲田大学システム科学研究所ビジネス教育課程の研究生時の研究であり、中根甚一郎先生をはじめ諸先生方に多くのご指導をいただいたことに対し、厚く感謝したい。

参 考 文 献

- [1] 松田正一著 システム理論序説 1971
- [2] 林知己夫著 数量化の方法 1974



●都市計画と交通●

- 第28回 1月23日(水) 学生卒業研究の発表2件。
 - ① “貨物輸送の展望” 岡野, 田中, 中島氏
 - ② “都市の動態モデル” 青野, 飯島, 大瀬, 佐藤氏
(いずれも工学院大)

前者は、貨物輸送の実態を分析し、省エネルギー施策として、交錯輸送の排除と輸送機関の最適分担を提案するものである。出席者から“交錯輸送”のとらえ方の問題などが指摘された。後者は、都市を動きのある有機体として、その姿を定量的にとらえようと試みたものである。都市の成長、活動量、流動性(交通)を表わす指標を作り、歴史的推移を見ているが(たとえば、成長だと非農地率をとり、ロジスティック曲線を当てはめるなど)、人的活動量のとらえ方には議論があった。出席:17人。

- 第29回 2月20日(水)(最終会合)。
 - ① “鉄道貨物輸送合理化の一提案” 馬場知己氏(都市環境システム研)

貨物駅(拠点)を通過駅型にし、大型パレットを特急貨物列車に5分の停車時間内で一斉に積卸しできる設備を設け、旅客輸送並みのサービスを行なうというアイデアが紹介された。(「生産と運搬」2月号所収)

②まとめ

最終回なので、今までに検討したテーマ、やり残したテーマをふりかえり、若干の整理と自由討論を行ない、4月から新発足の“交通問題”部会に今後を期待して散会した。出席:8人。

終了に当り、会場等でいつもお世話になった東洋経済

新報社と同社出版局藤井真人氏に謝意を表したい。

●「創造性開発の数学モデルと Computer Based Design」研究部会●

●創造性開発の研究は市川の等価変換、ブレンストーミング、W. J. Gordon の Synectics など古くから論議されてきた(鶴山他; 創造性研究ハンドブック, 誠信書房)。最近、創造性開発の必要性が再燃しはじめた。(本学誌: Vol. 25 No. 2 122~124 Vol. 25 No. 3 180~186, および川上; 国家の興亡と独創 情報処理: Vol. 19 No. 1, C. Yang; ビジネス思考学 中公新書 1980)。

ひるがえって80年代のわが国の文明、社会構造、産業に想いをめぐらすと、経済大国にはなったが、物・エネルギーに乏しく、これをカバーするには高学歴・情報産業の優位さを用いた創造性豊かな知識集約が必要といわれている。

他方、コンピュータが身近かになり、会話型言語でソフトウェアもアクセスしやすく、ひらめきのチェックができ、イメージを形成ししやすい画像処理がマイコンでも可能でアイデア開発に有力となった。

そこで当部会は当面、

- ①創造に関する科学の権威者の招へい
- ②創造およびその関連用語のイメージ合意形成を行なう予定である。

●第1回は4月23日に10名で行ない、次のように研究方向の討議を行なった。

- 議事
1. 研究会発会趣旨説明
 2. 研究会の方向づけ討議(目的、範囲、スケジュール)
 3. 隣接科学・工学説明、招へい講師提案
 4. 運営のしかた討議(月例会曜日、時間、担当、場所)
 5. 次回テーマ決定